

神門郡

かんどぐん



神西湖

駅と道の駅キララ多伎

大化の改新以後、当時の交通制度も整ってきており、昔の高速道路とも言える駅路と呼ばれる幹線道路には、通信・交通・宿泊等機能を持つ施設として駅が設けられ、出雲国には、東から野城（のぎ）・黒田・宍道・狭結（さよう）・多伎の五つの駅があった。神門郡に所在する二つの駅のうち、狭結駅は、古志町古志本郷遺跡で発掘された神門郡家と同じ所にあったとされる。

もう一つの多伎駅の位置については、多伎町久村西あたりとされている。平成10年（1998年）に、ちょうどそのあたりに「道の駅キララ多伎」が開業し、その駐車場には「多伎駅出雲国風土記登場地」の標柱が立っている。



道の駅キララ多伎

「出雲国風土記に記された郡内人口」と「郡内と想定される現在の地域に住んでいる人口と世帯数」

郡内	現在	現在の地域(上段:世帯、下段:人口)																		
		合計	【出雲】朝山	【出雲】神原	【出雲】上塩冶	【出雲】茶山新町	【出雲】塩冶神前	【出雲】南町	【出雲】医大南	【出雲】今市	【出雲】大津									
8 郡	朝山郷	合計	852	308	544															
	22 里	800	2,926	1,041	1,885															
2 駅	日置郷	合計	2,015	1,214	89	413	158	141												
	1 余部	1,200	4,976	3,151	242	941	308	334												
1 神戸	塩冶郷	合計	6,593	119	2,743	3,731														
	1 余部	1,200	16,355	299	6,623	9,433														
1 神戸	八野郷	合計	5,871	479	高岸郷	1,214	1,848	486	1,232	190	422									
	1 余部	1,200	14,759	1,304	大塚四郎で計上	3,294	4,421	1,449	2,707	522	1,062									
1 神戸	八野郷から日本海側へ(神門水海)	合計	1,912	1,114	538	260														
	1 余部	4,447	3,032	1,590	825															
1 神戸	高岸郷	合計	4,695	2,211	1,317	575	131	461												
	1 余部	1,200	10,941	5,166	3,000	1,228	282	1,265												
1 神戸	古志郷	合計	3,211	734	675	867	283	363	289											
	1 余部	1,200	9,494	2,073	1,980	2,553	877	1,065	946											
1 神戸	狭結駅	合計	0																	
	1 余部	400	0																	
1 神戸	滑狭郷	合計	5,089	1,329	1,707	124	33	336	356	514	212	478								
	1 余部	800	14,291	3,745	5,085	362	87	979	1,029	1,265	561	1,178								
1 神戸	多伎郷	合計	1,351	285	249	412	323	64	18											
	1 余部	1,200	3,703	829	673	1,095	903	151	52											
1 神戸	多伎駅	合計	0																	
	1 余部	400	0																	
1 神戸	余戸里	合計	776	221	96	61	34	247	29	12	76									
	1 余部	400	2,252	682	291	173	119	615	113	33	226									
1 神戸	神戸里	合計	256	256																
	1 余部	400	846	846																
総計			32,621																	
神門郡(等級:中)			10,400																	

佐志武神社例大祭 神事華



毎年10月18日・19日に行われる佐志武神社秋の例大祭は、勇壮で優雅な独特の雰囲気をもった出雲地方最大級の祭りです。特に、奉納される4×5基の「神事華」は、大変見事です。「神事華」とは、金・銀・赤・紺・緑と色鮮やかな紙の花で飾られた花笠で、直径5メートルを超える大きなものです。「はだこ」という揃いのいでたちの男衆が、勇壮な木遣唄(きやりうた)を歌いながら、この「神事華」を担いで地区内を練り歩き、神社に集結します。境内に入ると、華の上に「踊り子」と呼ばれるからくり人形が取り付けられます。さらに、翌日には、社殿の回りを数回ひき回した後、夕方には華は威勢良く倒され、境内を埋め尽くした群衆が、われ先にと競って家に持ち帰ります。この華は無病息災などのご利益があるとされています。

●多伎いちじく
多伎の特産として町の代名詞となったいちじくは、島根県のブランド産品に指定された人気の産品。生果だけでなく加工品も、美容と健康にいいと評判です。



●西浜いも
湖陵特産の西浜いもは、とにかく甘いのが特徴。その風味を活かした芋焼酎、芋アイスも人気です。



●しじみ
出雲地域では、宍道湖、神西湖、神戸川産のしじみを味わうことができます。通年漁獲されますが、産卵のため身が肥えた7月前後の「土用しじみ」、越冬のため栄養を蓄えた1・2月の「寒しじみ」の2回の旬が美味と言われています。



神門と名づけるわけは、神門の臣伊加曾然(いかそね)の時に神門を負担した。だから神門という。そして神門臣たちは古より今に至るまで、ここに住んでいる。だから、神門という。どの記載が『出雲国風土記』の神門郡にあるが、さてこの意味はというと：かつて伊加曾然という人物が「神門を負担した」つまり、神の門の造営・寄進をした。その功績により「神門」という氏名を名乗るようになった。そして昔から当時まで「神門」という氏名の人々が住んでいるので、ここは「神門郡」となった。ということであろう。では「神の門」というのは何を指すのか。やはり、杵築大社(現在の出雲大社)の鳥居と考えられているようである。鳥居の材料となる巨木が、神門郡内を流れる神門川(現在の神戸川)の水運を使って運ばれたのだろうか、と想像してみたい。

神門郡の神社

- ※美久我（みくが）社 ※阿須理（あすり）社
 - ※比布知（ひふち）社 ※又比布知（またひふち）社
 - ※多吉（たき）社 ※夜牟夜（やむや）社
 - ※矢野（やの）社 ※波加佐（はかさ）社
 - ※奈売佐（なめさ）社 ※知乃（ちの）社
 - ※浅山（あさやま）社 ※久奈為（くない）社
 - ※佐志牟（さしむ）社 ※多支枳（たきき）社
 - ※阿利（あり）社 ※阿如（あね）社
 - ※国村（くむら）社 ※那売佐（なめさ）社
 - ※阿利社 ※大山（おおやま）社
 - ※保乃加（ほのか）社 ※多吉社
 - ※夜牟夜社 ※同夜牟夜社
 - ※比奈（ひな）社
- 〔以上二十五所はいずれも神祇官社。〕

- ※塩夜（やむや）社 ※火守（ひもり）社
 - ※同塩冶社 ※久奈子（くなし）社
 - ※同久奈子社 ※加夜（かや）社
 - ※小田（おだ）社 ※波加佐社
 - ※同波加佐社 ※多支（たき）社
 - ※多支々（たきき）社 ※波須波（はすは）社
- 〔以上十二所はいずれも不在神祇官社。〕

【解説出雲国風土記】本文・現代語訳より

華藏寺・金勢堂など

8世紀頃に行基（ぎょうき）が開祖したと伝えられる天台宗の古刹。境内を歩くと、縁結び・夫婦円満にご利益があると伝えられる金勢堂（こんせいどう）や、さらに小道を進むと池の中の小島に弁天堂（べんてんどう）が現れます。ご夫婦、カップルの境内散策は、いつの間にか肩寄り添って…。

神門寺

8世紀頃創建の浄土宗の古刹。弘法大師空海がここで「いろは歌」を作られたといわれ、その真筆が寺宝として伝えられています。また、境内には、歌舞伎の忠臣蔵にも登場する塩判官高貞（えんやはんたかさだ）や、俳人原石鼎（はらせきてい）の墓所もあり、この境内に立つだけで、歌舞音曲、文化教養レベルがグンとアップ。

岩根寺

昔、ある夫婦が岩根寺へ祈願して玉のような女の子を授かりました。歳月は流れ、時の帝（光仁天皇770〜780年）は、夢で、出雲の国に美しく賢い娘がいる。この絵と靴を持って行って、引き合わせてみようとお告げを受け、出雲への使者をたてました。そこで、田植えをして、親孝行の娘が、絵と靴をそっくりで美しく、靴もちよど足に合ったので、召されて天皇の后（吉祥姫）となりました。出雲版シンデレラ物語！

久奈子神社と栗栖山城址

伊邪那美命（いざなみのみこと）を主祭神とする久奈子神社境内からは、神戸川下流域一帯の出雲平野、北山山地の眺望がすばらしく、清々しい気持ちになれるおすすすめポイント。社殿のすぐ近くに、駐車場がありますが、道幅が狭いので、超スロー運転を。健脚の方は、神社より上に栗栖山城址入口の木標があり、山頂に向かう遊歩道で、日の出にトライ！

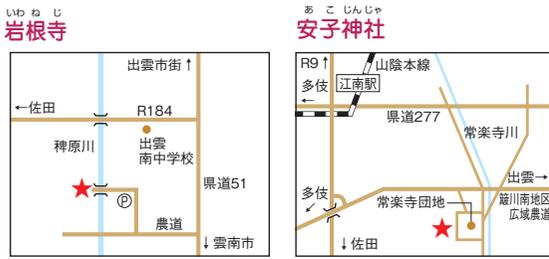
安子神社

安産と子授けにご利益があるといわれる木華咲耶姫命（このはなさくやひめのみこと）などをご祭神とする神社。毎年4月8日の例祭では、難産だった妊婦が安産になった故事にちなんで「御田植安産神事」が執り行われます。この御神事を拝むと、安産で子宝も授かると伝えられています。



岩根寺

大好き☆出雲！倶楽部で作成した「お願いどころマップ」



神門水海と神西湖

風土記に記載される神門水海は、風土記の時代は斐伊川・神門川（神戸川）からの土砂の流入が続いている最中で、「国引きの綱」である園の長浜が湾を蓋する*砂嘴（さし）でした。現在の荒木、長浜、湖陵の一帯は神門水海で、出雲大社の周辺は門前に多くの船が繋がれていた光景が見られたかもしれません。

*砂嘴とは、波などで運ばれた砂が海岸から細長く突堤状に堆積してできた地形のこと。

◆ 1300 年前にあった神社と現在状況

出雲国風土記	現在の神社	所在地
美久我社	弥久賀神社	湖陵町大池
阿須理社	阿須理神社	大津町
比布知社	比布智神社	下古志町 [智伊神社 (合祀)]
多吉社	多伎神社	多伎町多岐
	和歌山権現	多伎町小田
夜牟夜社	塩冶神社	上塩冶町大井谷
矢野社	八野神社	矢野町
波加佐社	波加佐神社	西神西町
	佐伯神社	神西沖町
奈売佐社	那賣佐神社	東神西町
知乃社	智伊神社	知井宮町
浅山社	朝山神社	朝山町
久奈為社	久奈子神社	古志町
佐志牟社	佐志武神社	湖陵町差海
多支枳社	多伎芸神社	多伎町口田儀
阿利社	阿利神社	塩冶町
阿如社	阿祢神社	湖陵町二部
国村社	國村神社	多伎町久村
大山社	大山神社	小山町
保乃加社	富能加神社	所原町
比奈社	比那神社	姫原町
火守社	火守神社	宇那手町
久奈子社	久奈子神社	古志町
加夜社	市森神社	稗原町
小田社	小田神社	多伎町小田
波須波社	波須波神社	佐田町下橋波

朝山神社

神門郡にある浅山社（現在の出雲市朝山町の朝山神社）と周りの山々には、次のような伝承が残っている。

「大國主命（オオクニヌシ）がデートのため、夕方、自分の家のある杵築郷を出発し、真玉着玉之邑日女命（マタマツクタマノムラヒメ）の待っている朝山郷の御殿にたどりつくのは、夜空が白くなり始めるころです。」

「しかし鶏が一番声をあげる朝方のころには自分の家へ向けて出発しなければなりません。」
「急いで、大國主命は、帰りにたくをなさるので、たいてい冠（かんむり）や、みかげ（男の人がつける髪飾りのこと）や、時には、手に持って歩く武器、鉾（ほこ）なども、つい忘れてしまうことがあります。」

「御殿のある所は、今、宇比多伎山（うひたきやま）となり、みかげは、今、陰山（かげやま）となり、鉾は榊山（ほこやま）となり、冠は冠山（かぶりやま）となっています。」

「そのほかにヒメが作られたものでしょうか、稲山（いねやま）や、稲積山（いなづみやま）も、存在しています。」

これらの6つの山が、浅山社を取り囲むように並んでいる。



参道入り口
徒歩の上り道で約20分、左側の大型林道を車で上れば、5分ほどで標高160mの山頂にある朝山神社にたどり着きます。



八百万神の最初のお宿 朝山十九社
神在月、全国の八百万神が出雲に参集された際に、まずこのお社に立ち寄りてから神議をし、出雲大社へ向かわれるといわれています。



屋根の棟飾りだったのでしょか。本殿の床下で、素敵な木彫りを見つけました。主祭神は真玉着玉之邑日女命。姿の美しい玉のような麗しい心をもった女の神様らしく、おしゃべりな雰囲気かただします。



展望台から見た雲井滝



宇比多伎山から大社方面を望む

境内左手から駐車場に向かうところで、「雲井（うい）神苑」「雲井滝入口」の看板が目に入ります。落ち葉で敷き詰められた小道を登ってみると目の前に景色が広がります。眼下には、神戸川を渡る山陰自動車道、その先に出雲平野が続き、出雲大社、日本海まで望むことができます。

あずまやを過ぎて、今度は険しい坂道を下っていきます。足元を気をつけながら下りること5分。滝から流れ落ちる心地よい水の音が聞こえてきました。小さな展望台からは、落差100mと言われる「雲井滝」を見ることができます。全姿が見えないのが残念ですが、落差では、出雲国随一の滝になるでしょう。八百万神もお立ち寄りの際、この滝と景色を眺めながら森林浴をし、リフレッシュしてから、出雲大社を目指されたのかもしれない。

多伎藝神社

『出雲国風土記』の「多支枳社」と言われている。出雲市の西端となる多伎町口田儀にある。出雲市中心部から国道9号を西へ進み、石見境の手前から、県道284号へ左折し約2キロメートルのところにある。往古は宮床という所に鎮座、延宝8年（1680年）現在地に遷されたようである。

『出雲国風土記』には、在神祇官社としての「多支枳社」と、不在神祇官社としての「多支々社」があり、多支枳社が式内多伎藝神社であり、多支々社は現在境内社となっているとされている。

鳥居をくぐり、石段を上ると境内となっている。境内を囲む山の斜面には今では珍しい自然石が積まれている。雷大明神と称され、古来雷災を受けず、守札を所持すれば雷除けになると言われている。

例祭は毎年10月19日に執り行われ、祭事が始まる14時を目前に、奉納神楽（出雲神楽）、花馬神事、田植囃子奉納の3つの伝統芸能が一堂に集結し、近隣でも一番賑やかな祭りが継続されている。また、祭事にあわせ、たたら製鉄で旺盛を誇った宮本内から奉納された神輿も引き継がれ、獅子舞とともに神主を先頭に境内を清閑に歩く姿も見られる。

また、獅子舞は最後に土俵の上で、神主の持つご神刀により退治され、祭事が終わるようになっており、珍しい光景と言われている。



鳥居をくぐり石段を上る



境内を囲む石垣

取材レポート

神西の南部広域農道沿いにある那賣佐神社。鳥居をくぐると230段の石段が待ち受けていました。苔に覆われた石段を進み、2度の曲り階段を超えた先に、社殿が現れました。地元の方によって、整備され大切にされてきた様子が、ここかしこに伺えます。那賣佐神社社務所が昭和62年（1987年）秋に正遷宮記念に発行した「那賣佐神社御由緒記」によれば、主祭神は、葦原醜男（アシハラシコオ）命（大國主命の別名、配祀神は須勢理姫命、合殿は伊邪那岐（いざなぎ）命とありませ。本殿の横に確かに、「伊邪那岐（いざなぎ）命社」と書かれた社殿も別にあります。伊邪那岐命も祭られている言われは分からなかったですが・・・。

社殿とともに、その近くにそびえる3本の銘木も忘れてはなりません。樹齢は不明ですが、この神社とともに悠久の歴史を感じることが出来ます。

那賣佐神社の横を進むと、さらに山の方へ階段が続きます。「神西城址登り口（徒歩5分）」の看板を目印にさらに上を進みます。さきほど上った230段の整備された石段とは異なり、急で滑りやすい階段を歩く5分間は、とても長く感じました。頂上まで登りきると、北西側に開けた景観が広がります。神西湖、神西新町のニュータウン、長浜神社のある妙見山、その右手奥には神戸川の河口、また多伎の風車そして日本海までが一望できます。手前の木々の紅葉とのコントラストに思わず感嘆の声があがります。ここで、風土記編纂の頃に思いをはせてみます。当時ここから景色を眺めることができたのかは分かりませんが、目を閉じて、風土記編纂の頃の鳥瞰図を思い描いてみます。約1300年前は神西湖から大島町そして神戸川とその右岸一帯は「神門水海」であり入海が広がっていたはずですが、今とは景観が全く違いますが、紅葉のコントラストは変わっていないでしょう。豊かな自然に感謝と敬意を覚えます。

つづいて、那賣佐神社から南部広域農道を数百メートル東に進み、林道岩坪線に入ります。車でほんの数分のところに入大國主命が「滑らかな岩（原文：滑磐石）」である。」とおっしゃった岩坪があります。滑狭郷の名前の由来となった場所です。谷川の中に大小5つの穴が見えます。看板等がなければ、とてもそのようなゆかりのある場所とは気が付きません。穴もただの自然現象だろうかと思わないうでしょう。歴史とロマンにあふれる日本の心のふるさと「出雲」は、非常に奥深く、まだまだ知らないことが多いことを改めて思い知らされた日でした。

那賣佐神社と岩坪探訪

滑狭郷。郡家の南西八里の所にある。須佐能衰命（スサノヲノミコト）の御子、和加須世理比賣命（ワカスセリヒメノミコト）が鎮座していらつしやうた。そのとき、所造天下大神命（アメノシタツクラシオオミカミ）（大國主命の別名）が娶（つまど）りてお通いになったときに、その社の前に磐石（いわ）があり、その上がとて滑らかだった。そこで、「滑らかな岩（原文／滑磐石）」である。」とおっしゃられた。だから南佐（なめさ）という。神亀3年（726年）に字を滑狭と改めた。



「伊邪那岐命社」も鎮座



神西湖、日本海を望む



地元の心気が感じられるお盆前には「城」が出現



紅葉とのコントラストも素敵！



黄色のいちょうのじゅうたんでパッと明るく



銘木



不思議な穴。和加須世理比賣命の産湯？



木が映し出された岩坪も美しい



登り切った先に本殿が鎮座



苔の生えた石段を進む



穏やかな湖面と湖岸のヨシ原が美しい神西湖



夏の夜をいろどる美しい花火！
※平成 23 年（2011 年）8 月に出雲市ホームページに掲載された内容です。

夏の夜は、何といてもやっぱり花火です。出雲市内では大小たくさんの花火大会が開催されますが、中でも「神西湖湖上花火大会」は、私の大好きな花火大会です。この花火の特色は、陸地からの打ち上げと湖面からの打ち上げが同時に楽しめ、更に、それぞれが水面にくつきりと映し出されることです。この写真を撮った時は、神西地区側からの打ち上げ花火と、湖陵町側の水上からの投げ込み花火が、なんともいえないハーモニーを醸し出していました。

文・写真提供／森山誠さん

神西湖湖上花火大会

神門水海は、神門郡家から「正西四里五十歩」の所にあったとされており、その周りは「三十五里七十四歩」とされている。現在の神西湖は周囲6キロメートルの小さな湖だが、「出雲国風土記」の時代には、東は出雲市知井宮町、西は「菌の長浜」、南は出雲市湖陵町三部、二部、大池の北部、北は出雲市浜町のあたりまでであったと考えられている。「中には鱒魚（なよし／ボラ）、鎮仁（ちに／チヌ）、須受枳（すずき）、鮒、玄蠣（かき）がある。」とあり、これらはいずれも、大半が海水と淡水が入り交じる汽水域の生物である。

神門川（現在の神戸川）も出雲大川（現在の斐伊川）も神門水海に流れており、このうち出雲大川には「年魚（あゆ）、鮭、麻須（ます）、伊具比（いぐい／ウグイ）、魴鱧（むなぎ／ウナギ）などの類があり」との記載があるので、これらの魚介類が捕れたと考えられている。

現在の神西湖でもウナギ、フナ、ボラのほかシジミなど70種類以上の魚貝類が生息している。

神門水海のあった場所の一部は、現在では出雲長浜中核工業団地となっており、現在の出雲市の産業の中心となっています。また、出雲ブランド商品である「LED 照明器具」「(炭入り健康ベッド) 森の寝床」「寝装カバー」「出雲神話紙芝居」「タオル製品」「(調湿木炭) 炭八」などは、この神門郡にある会社で生みだされているので、昔も今も、出雲国の産業を支えていた地域と言ってよさそうです。※平成 27 年（2015 年）3 月現在

このうち「タオル製品」と「(調湿木炭) 炭八」は、出雲ブランド化推進市民委員会で工場見学を行ったので、そのレポートを掲載します。

工場見学レポート

「調湿木炭 炭八（出雲カーボン株）」を紹介します

子どもたちに伝えたい出雲の産業

解体木材から生まれ、家の中を心地よくする「調湿木炭」。良質の炭づくりには、4つのポイントがありました。

- 1 材料の選別。吸湿性の良い炭となる針葉樹のチップが主原料です。
- 2 チップの大きさ。通気性を考え、床用は大粒、天井用は小粒を使用します。
- 3 炭焼きの温度管理。里山での炭焼きと同じで、窯の中の酸素の量で温度調整します。
- 4 原料木材チップ自身が燃える熱をエネルギーにして、満遍なく焼き上げる揺動式炭化炉が採用されています。

こうしてできる炭は、電気を通す純粋カーボンで、調湿性能は半永久的と言われています。

炭づくりの工程が管理され、品質マネジメントシステムのISO9001※を取得しています。※国際標準化機構により制定された、製品やサービスの品質を保証するための管理体制に関する国際規格。

出雲ブランド商品物語「見えないものを見せるための地道な取組」

一昔前、冬に暖を与えてくれた主役の「木炭」。一方、「炭八」は、木炭が持つもう一つの機能「調湿」を活かし、家々に快適をもたらす商品です。

しかし、調湿等の効果は、目に見えてすぐ分かるものではありません。商品として認められるまでには、島根大学総合理工学部との共同研究で、効果をデータ化して見せ、さらに効果を高める加工方法を追求する地道な積み重ねがありました。

出雲高校の「課題研究」では、「狭い空間での調湿と脱臭効果」が取りあげられましたが、「炭を使った家に住むと健康になった。」と言われることが、次に求める課題です。現在、島根大学医学部にも加わっていただき、健康への効果を検証するために、ストレスや、体温のデータを集めています。

もうひとつ注目すべき点は、「再利用」です。解体木材の再利用に新しい活路を見出した発想に、多くの人の知恵、技術が加わった商品が、全国で使われています。



商品説明の様子



揺動式炭化炉



細かく粉碎された木材チップ

工場見学レポート

「タオル製品（KBツツキ株）」を紹介します

子どもたちに伝えたい出雲の産業

綿糸生産量はダントツで国内ナンバーワン。綿花100%の糸を、独自の開発技術で生産する工場は、世界でオンリーワン。有名な「今治タオル」や「泉州タオル」用の糸を生産する、優れた技術を守り続けている出雲の工場です。

50年以上の歴史を持つ「TNS綿紡績方式」と呼ばれる世界特許の技術で、その糸は紡がれます。「TNS綿紡績方式」では、綿糸の原料に軽くよりをかける「粗紡工程（そぼうこうてい）」を踏まず、繊維の方向をそろえてひも状にした綿を、工場約1か月間熟成させ、縮れを自然に回復させてから糸に仕上げます。やわらかい肌触りと、1工程省くことにより環境にやさしい方式と評価されています。

「TNS綿紡績方式」をさらに進化させた、強く、毛羽の少ない「超綿糸ザ・出雲」も使い手から好評を得ています。

技術者も地元の方で、200名余りの従業員の約9割が地元採用の方々です。機械化・自動化された生産工程ですが、最後は人の目でのチェックが入ります。

原料の綿花は、国外の広大な畑で生産されたものがほとんどですが、出雲工場敷地内にも、7,000㎡の木綿畑があり、秋にはふんわりと美しい綿花が一面に咲きます。

出雲ブランド商品物語「贈り物のタオル」

贈り物としていただき、箱に入ったまま半年が過ぎた頃、里帰り出産のために帰省した娘が見つめ、使い始めました。使い心地のよさと、何度も繰り返しの洗濯にも変わらない強さ。「歴然とちがうタオル」を実感しました。その糸が紡がれたのは、出雲だと後から知りました。多くの方々働き、経済成長の始まりの時期にけん引役となった日本の繊維産業の歴史。繊維のまち出雲として栄え、今なお輝きを放つ出雲の工場!! 出雲の糸は、多くの人と人を結ぶ素敵な糸です。



随所に省力化されている工場内



工場敷地内の木綿畑



出雲国風土記掲載事項チェック

	風土記表記	現在名称	所在地
神	総記	南佐	滑狭
	神門臣	神の門の造営・寄進したためそのままの氏名になった。	
	負担した	貢とあるが「負」とした	
	神門郡家の所在地	古志町・下古志町の古志本郷遺跡	
	真玉着玉之邑日女	他に見えない神 玉之邑の姫神(玉之邑は聖霊の村) 真玉着(次の玉にかかる枕詞):真実精良な玉を身に着けるその玉 玉之邑日女	
	日置伴部	日置氏の部民(伴部は諸氏族に従属した部民)	
	塩冶毗(田辺に比)古能命	他には見えない神。塩冶の地の守護神である男神	
	八野若日女命	他には見えない神。八野の地の守護神である若い姫神	
	高椅	高い梯子	
	伊弉那彌命	イザナキとともに国生みを行った 伊弉那彌命の時=遙か昔のこと	
郷	日淵川	保知石川	知井宮町
	和加須理比売命	スサノオの娘 スセリヒメ(古事記に登場)	
	盤石	大きな石の事	
	阿陀加夜努志多伎吉比売命	他には見えない神。 はじめ出雲郷の守護神であったものが、後にこの地に来て鎮められた神	
	狭結駅	日淵川流域の下古志町布智付近の地域	
	佐与布	池の堤防を造るために来た古志人の一人 (名前と住所が伝わっており要職についていた可能性)	
	多伎駅	多伎町久村の西辺	
	新造院(朝山郷)	神門寺	塩冶町(もとは馬木不動付近にあった?)
	新造院(古志郷)	古志遺蹟?	
	門	田俣山	王院山(H554m)
長柄山		弓掛山(H291m)	見々久町
吉栗山		吉栗山(H311m)	佐田町一窪田の栗原付近の山
宇比多伎山		宇比多伎山(H187m)	所原町の朝山神社がある山
(御屋)		(宮 この山そのものが神の宮だった)	
稲積山		稲積山	朝山町の杉尾神社がある岡
(稲積)		収穫した稲を積んで蓄えた。この山がその形に似ていた。	
陰山		陰山	宇比多伎山東方の北端に岩根寺がある山
(御陰)		頭にかけて髪飾りとしたもの	
稲山		稲山	岩根寺の対岸にある山
郡	(磯)	風土記の磯は海岸だけではなく岩石の路頭した岩場を指す	
	(御稲)	神饌用の稲	
	梓山	梓山	陰山、稲山の東方にある岩山
	(御梓)	神の御用の鉢	
	冠山	冠山(H250m)	陰山、梓山南方の山
	(御冠)	神の御用の冠	
	神門川	神戸川	琴引山から出て北に流れ水海に入る
	多岐小川	田儀川	
	多岐々山	田儀川西方国境にある山塊	
	河川・池	宇加池	下古志町南方
海岸地形	来食池	下古志町北部にあった(今は田になっている)	
	笠柄池	知井宮町保知石に浅柄池という地名が水田になった。(詳細不明)浅柄という地名は残る。	
	刺屋池	詳細不明	
	神門水海	神西湖の一部を残す古代に存在した大きな湖 (東は知井宮町、西は菌松山、南は湖陵町三部、二部、大池らの北部、北は浜町のあたり)	
	菌松山	菌の長浜	
	美久我林	湖陵町大池の弥久賀神社北方の砂丘	
	中島埼	詳細不明	
	出雲河	斐伊川	
	堀坂山	堀坂山	飯石郡の境
	通道	与曾紀村	乙立町向名
石見国安濃郡		大田市東部	
川相郷		大田市川合町付近	
郡司	刑部臣		
	神門臣		
	吉備部臣		



「高層神殿」 追体験事業
巨木の川流し



吉栗山の麓、原川公民館の後ろにひっそりと鎮座する足高神社。オオクニヌシの御子神、阿陀加夜努志(アダカヤヌシ)が祀られている。

吉栗山と神戸川

これらの追体験事業により、『出雲国風土記』の世界を、市民の力で見事に再現し、地域の連帯感、郷土への誇りを抱くことができました。このときの柱は、平成27年(2015年)に新築される佐田中学校の玄関吹き抜けに建立されることになっています。

「〜古代出雲大社の御用木について」
『出雲国風土記』によると、出雲大社の宮材を出雲市佐田町の「吉栗山」より切り出したとある。この故事にならない、平成24年7月29日、同地区の郷人の想いとともにもスギ材が奉曳された。この柱は、その際のスギ材を使い、宇豆柱(心御柱)をモチーフにして、出雲大社の御神徳に感謝し、まちの活性化を願う人々により建立された。」とあります。

翌年、平成25年(2013年)には、「平成の大遷宮」に併せ、地域が一体となって実行委員会を立ち上げました。『出雲国風土記』の「高層神殿」追体験事業として、直径80センチ、長さ17メートルの杉三本を運び出し、筏(いかだ)を組み、神戸川に流し、里曳き・柱立てが壮大に行われました。



大社神門通りにあるオブジェ



吉栗山より三瓶山を望む。右は窪田小学校

石見国との境
吉栗山(現在の佐田町一窪田)の頂上付近から南を眺めると上佐津目、山口(現大田市)、そして三瓶山まで見渡すことができます。ほとんど出雲の国だったところです。風土記の時代から昭和29年(1954年)まで、出雲国と石見国との境は三瓶山の頂上でした。国引き神話の中では、国を引いた綱をかけた杭が佐比売山(現在の三瓶山)で、綱は「菌の長浜」になったとされています。



斐伊川町上空より斐伊川放水路を望む(平成24年4月)

「河の両辺にはあるところは土地が肥え、穀物や桑・麻が枝をたわめるほど稔り、人々の豊かな園である。またあるところは土地が肥え、草木が生い茂っている。年魚・鮭・麻須・伊具比・むなぎなどの類があり、潭渚に双び泳ぐ。河口から河上の横田村までの間、五郡(出雲、神門、飯石、仁多、大原郡)の人々は河を便宜に暮らしている。孟春から季春まで、材木を流すことを検閲する船が、河の中を上り下りする。」

斐伊川と神戸川の周辺に住む人々は川と密接な関わりをもちながら、自然の恩恵を受け、歴史を刻んできました。現在は、堰やダム建設により河川環境が変化し、鮎など魚の漁獲量は減少してきました。自然豊かな神戸川を取り戻せるよう、地域の文化を育む川を目指し、周辺の幼児や小学生を対象とした稚鮎の放流活動や地域住民による清掃活動等、資源を守るための取り組みが行われています。

また、斐伊川は、土砂の堆積によりたびたび洪水を起こし、不安定な流路がヤマタノオロチ伝説の基となったと言われています。風土記の時代には、神門川と共に神門水海に注いでいました。江戸時代、寛永年間の洪水によりその流れを東に変え宍道湖に注ぐことになり、出雲平野は豊かな穀倉地帯となりましたが、湖沿岸は、洪水による浸水がその後も起こりました。昭和47年(1972年)7月の洪水を契機に「平成のオロチ退治」と称して、斐伊川の洪水時に神戸川へ分水するため斐伊川放水路が建設されました。平成25年(2013年)運用を開始し、2つの川は、再びつながることになりました。

出雲大川(斐伊川)と神門川(神戸川)